

## 五感の学校アートトーク Vol. 5

2011年2月10日（金）柏の葉アーバンデザインセンター

### 【ゲスト】

曾我高明（現代美術製作所）

村山修二郎（墨東まち見世参加アーティスト）

曾我（以下：曾）

初めてつくばエクスプレスに乗ったが、向島と対象的だと感じた。

97年から向島で現代美術製作所で様々なアートプロジェクトを実施している。

工事を現代美術製作所として開いた。アーティストを連れてきて展示をしたら、家族も応援してくれるようになった。

NP0 法人向島学会に関わっている。学会という名前の理由は、学生などが研究した成果を外だけでなく、向島のなかでも発表するアーカイブのプラットフォームにしたい。古い地元の人から、学生、大学先生、アート関係者が集まっている。交流サロンや定期的な集まりを行っている。

まちづくりの調査事業、アートのまち講座、他の地域との交流事業（まちづくり、アート）など。2002年に立ち上げた、それまでは、防災のまちづくりやドイツとの交流などが20年ほど前から各々活動していた。そのメンバーが集い、向島学校ができた。朝日アートフェスティバルとの付き合いなどがあり、アーティストが街に住み着いてアート色が強くなってきた。

路地尊等の防災の活動、防災ワークショップ等も実施している。

海外との交流は、ドイツ人の監督が映画をとったことをきっかけに、市民の交換留学等を実施している。

朝日アートフェスティバルのプロジェクトもかなり多い。アーティストが持ち込んだ企画も併せつると、毎年何かしらが実施されてる。

2000年には大きなイベント（向島学会ができるきっかけ）として向島博覧会を実施。空き地に子どもが遊びたくなるようなオブジェを設置したり、長屋を使った写真展など。そこからきっかけになり、向島に住むアーティストが何名かいた。

改装した長屋でイベントを行ったら、地元の人が多くくるようになった。それが、現代美術製作所からでて街の中で関わるきっかけになった。古い街に何か力があることを感じた。

KOSUGE 1-16 自転車で長屋を通り抜けるイベントを実施。古い街にアーティストが道をつくってコミュニケーションが生まれるメタファー。古いものと新しいもの。こうい

う視点が向島がある。ダイナミックに仕掛けることができる寛容性があるとのこと。向島の工務店や金属加工の職人など、地元の知恵を世界に発信している。

京島の米やを使ったライス+というカフェ。学生とアーティストがカフェを製作。2Fにレジデンスがあり、展示を行うなどの活動をした。

2000年の向島博覧会のあと、4年後に長めの開催期間を設定したイベント向島イヤーを実施。プロセスを重視した。都市計画キャラバンという企画と乗合で実施。半年間位の間でプロジェクトを実施した。

小学生との壁画製作や曳舟の駅前にレンタサイクルの拠点を作る企画、向島の夏みかんを集めてジャムを作るワークショップ等を実施。

鳩の街通り（店舗数が少なくなっている）では空き店舗を使ったプロジェクトを実施した。空き店舗を使ったコンペや模擬店など。鳥のマークという劇団が向島百花園で向島の記憶をテーマにした演劇を実施した。

鳥のマークはこの後に助成金をとり、実際に鳩の街の中で店舗をつくり、現在では商店街の理事として有名店となり経営している。結果、人の流れが代わり、店舗も増えている。

地域資源を使いながら、街中で展開をしてきた。向島学会はネットワークとしてサポートしながら実施してきた。

東京スカイツリーは大きな環境変化。この他にも曳舟駅前にイトーヨーカドーができるなど。街の変化にどう対応していくかアーティストも考え出した。

水琴窟の作品「路地琴」を製作して、路地の風景を見出す。あいまいな境界の良さを見直すプロジェクト。そこが向島のコミュニティの良さである。

商店街は商店街で危機感がある。鳩の街商店街では、古いアパート「鈴木荘」をサブリースするなど。コンペをしたら60名くらいが集まり、そのニーズがあることがわかった。今年に助成金が残るが、今後も継続することになっている。

墨東まち見世は向島学会初の主催事業。2009年から実施。東京都と学会でアーティストを選んで始めた。空き店舗で100日間何かをするプロジェクトなどを実施。食のアーカイブを作るワークショップや、村山さんの路地園芸をテーマにしたスタンプラリープロジェクト等を実施。ここで参加した作家やサポーターが実際に住むようになってしまった。

2010年はプロジェクトはできるし、街の課題もみえてきたため、みんなが参加しやすい体制にするため、準備会議を始めた。

街の中に拠点をもつ作家が増えたことから、フラットな企画会議で作家の選定を行ってきた。

今年の企画としては、クリスマスの為に銭湯などで靴下を集めるプロジェクトや民家の窓ガラスに人影の映像が映るプロジェクト、レトロクッキング（古い料理の復刻）などを実施した。

墨東文庫；街の記憶を目録としてエピソードを本にするなど。

サポーターから何か始める人が多くなった。女子力が大きい。普段はOLをしているが、自分の時間で何かプロジェクトを皆で実施するなど、拠点づくりになる。アーティストと何かしたいという純粋な気持ちで行っていることがいい。映画館や、本屋などこういう人が向島に4人ほど居り、30年代の女性が多い。これはアーティストが街に住むのとは少し異なるフェーズで彼らは、新住民（マンション住まいの住民）との街の人をつなぐ人材になっている。

向島イヤーのときはシンプルだった。アーティストがいて実行委員会がある。ほとんどがスペースもサポーターも自分たちで見つけてくる状況。

街見世になると、向島学会と東京都があり、少し錯綜した。

今年はさらに整理をして、企画会議という意味決定組織をつくり、仕事分担を行うことにした。参加企画と、サポーターと、アーティストのプロジェクトを調整するようにした。

学生、社会人、アーティスト、外から来た人など、横のネットワークが広がってきた。

村山修二郎（以下：村山）

私自身は東京藝大の油絵科を卒業し1999年から向島に在住している。墨田区内の向島界隈にてプロジェクトを2007年から助成を受けてプロジェクトを実施してきている。2009年から向島学会に関わっている。

植物に関わるプロジェクトを実施している。

地域プロジェクトを行うときは1ヶ月ほど調査をする。植物のアートスポットを探してそれを紹介する「植めぐり」を行っている。この企画の中で、地元の人には気にしないけれども面白いスポットが数多くある。完全に道にはみ出している路地園芸や、その言われを聞いたり、植物を通しての住民通しの交流などを見てきている。

2007年の作品は路地園芸を持ってきてそれを見てもらう。どこにでもある鉢植えの生しい植栽を1000個集めて展示をした。勝手に育っている植物の力強い姿があった。2008年は幸せの黄色い鉢を実施。植物を通した街の景観の中に、黄色い鉢を置くことで幸福感を表現している。要らなくなった鉢をワークショップで黄色に塗り、街の中で使ってもらってる。

2010年のプロジェクトでは、路地園芸といものを実際に見てもらいたいことから、それを進化させて、移動式の路地園芸を作って人に見せるプロジェクトを実施した。様々な機能を持たせた屋台。雨水を貯めたり、本をおいたり、消化器を設置した移動式の作品で、移動しながら交流するというプロジェクト。作品を設置するときは人を信じるところから始めるが、今回も特にいたずらをされることはなかった。

新東京タワー開発に際し、都市開発で見過ごされがちな、足元で人が息づく街並みを感じて貰いたかったため企画をした。

アートプロジェクトを通して住民とのかかわりを持つことで自分自身も鍛えられ、変わったという。地域プロジェクトと関わる姿勢としては、いきなり自分の作品を持っていくのではなく、地元の人と話しながら、それを自分の作品に反映させていく事を意識している。

質問・フリートーク

松田朋春（五感の学校ディレクター）以下：松  
まちづくりとアートのリアルな話を聞いて良かった。

村田宜顕（三井不動産レジデンシャル）以下：村田よ  
今回のプロジェクトを聞いて楽しそうだと感じた。向島で10年以上やっての街が変わった印象は？

曾

変わったが、アートで変わったというよりも、世代交代を感じる。苦情が減ってきた。それは若い人が増えたこともあるし、アートに慣れてきたのかもしれない。見てみぬふりをしながら、見守ってくれるひとが増えたのかも。根付くまでに時間がかかっている。問題点としては、助成金を違う顔でとることが多く、継続事業が出来ない。この先にもどのように残すかを意識し、向島が学会でも企画会議を立ち上げた。今までお金が無くてもやってきたので、何とかはなると思っている。

村山

作家の立場としては、焦ってはいない。そんなにうまくいくわけないと思っている。生きていく中で一緒にやっている。言葉で「アート」なんて言っていない。地元の特化したらしを作ったり、住民に分かりやすく。時間をかけて少しずつ行っている。プロジェクトを通して話し方が変わった。

松

柏の葉は路地もないし、セキュリティも厳しい。

村山

そのへんが下町でやる楽しさ。鍵をかけていない家も多い。

曾

元々向島では外部からの人を受け入れてきた。排除する感じはない。

アーティストを含めてコミュニケーションを取れることはない。

墨東まち見世では同じアーティスト意識的に入れることは特にないが、企画の安定性を考えると何回かやった人も多い。

全部が全部ハイクオリティではないが、繋がりを大事にしている。

松

JR 柏の方のアートプロジェクトと味わいが違う。現代アートの味わいが向島にはある。

曾

朝日アートフェスの影響も多いかもしれないが、伝統的なものよりも現代アートの方が地域に馴染み易いのでは。街に手応えがある。街との関わり方に芯がないといけない。批評性やネガティブなものなど、そういう視点を入れることが必要で、街のもうひとつの本音が見えてくる。街が停滞する原因は本音が無くなっているからでは。それを現代美術が見せることができるのではないかと。

街のことを親身になって活動できるのは村山さんの様にアーティストでないとできないかもしれない。

税金を使っている活動なので、メッセージとして発信することも意識はしている。

様々な団体の思惑があり、ずれながらもうまくまとまっていつている。

街が開発で変わっていくのは仕方がない面があるが、それをポジティブにうまく見せていくことを考えたい。

アートは目的ではなく、きっかけ

アートの楽しさとして分かっているならばツールとして考えるのもあるかも。基本的にアートは非効率なので。

松

狭い商店街にシャボン玉が湧いたり、影絵が窓に写ったりは感動する。

曾

商店街の子どもたちが喜んでくれて、商店の方にも非常に評判が良かった。だんだん協力体制が進んできている。時間をかけたプロジェクトをまちにどのように仕掛けるかが大事だと思う。

松

街の中でOLがスペースをつくるのは趣味のなんとかに近い気がする。上手に真似できる感じがあった。

曾

スペースを最初に計画した使い方ではなく、違う使い方をするのは面白い。それには経年変化があるていど必要かも。

勝手に改装させるスペースがあればいいのでは、仮設で立ててあとはどうぞ、のような余白をつくるのは大事。

村田修二（柏市生涯学習課）

一日だけオートロックが外れる日が会ってもいいのでは

村田よ

柏の葉の当社の分譲マンションは、まちに対しては開いているという思想で開発している。

ただし、各住戸のセキュリティは高い。

オートロックを外す日となると、住民の方の理解をどれだけ得られるかになる。

松

マンションの中廊下に路地園芸を置くとカッコイイ。

村田よ

企画時点では似たような案があったが、実際に管理の話になると難しい。

松

そこにそういうフロアをまとめる人ができれば可能ですね

曾

街をいっぺんにつくると、人が一気にはいってくるが、向島の町会は知り合いの繋がりが多。更新も緩やか。新しい街には街なりの大変さがあると感じた。

災害のことも考えている。倒壊の危険のある建物など。話合う機会がある。

松田

柏の葉との連携はどうでしょうか？

曾

うちの近所のおじさんを派遣するとか。町会長さんとか。

以前町会長がマンション住民のクレームの仕返しを頼まれマンションの全住民に手紙を書いた。向島はようこそ。向島は春はサクラ、夏は花火、町会は活発で祭りもある。是非町会に参加してくださいと書いたら、次の年全員が町会に入った。